

大学院へ行くと……

日本大学歯学部生理学教室 専任講師 北川 純 一

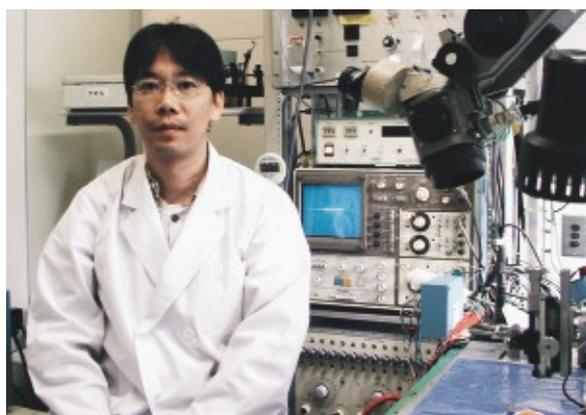
(28期生・平成14年3月新潟大学大学院歯学研究科博士課程修了)

この度、歯学部ニュースの特集テーマ「大学院に行こう」の原稿依頼をいただきました。依頼を引き受けてから気づいたのですが、このテーマは正確には新潟大学歯学部の「大学院に行こう」ということで、大学院修了と同時に新潟を離れてしまった私に、現在の新潟大学大学院歯学研究科のすばらしさを充分つたえることができるか少々不安です。あまり無責任なことも書くわけにはいきませんので、私が大学院に進むことになった経緯（しかも基礎系）や大学院生活で感じたことをなるべく正直に記すことにします。

・大学院進学

教養課程が終わり学部の講義が進むにつれて、自分自身に臨床医になる適性があるのかどうか毎日が不安で仕方ありませんでした。今思い返せば、それは単に技工物がうまく作れないなどといった、些細なことからの逃避だったのかもしれませんが。

4年生の頃から、生理学講座の山田教授と真貝助教授（当時）のお計らいで、生理学講座の研究室に机をもらい、自由に出入りしていたものの、大学院へ進学しようと決意したのは、6年生になってからでした。このころは、研究者になろうと決めていましたので、進学先も他大学の農学部や理学部の大学院を候補とし、受験の準備をしていました。しかしながら、詳しい事情は記しませんが、最終的には新潟大学大学院歯学研究科を選択し、生理学講座でお世話になることになりました。



・大学院生活

「咽・喉頭領域における化学感覚受容機構の解明」という研究テーマを頂き、私の大学院生活が始まりました。研究内容は専門的になりますので詳しくは書きませんが、仮説を立て、実験し、結果を解析し、論文にまとめる、といったことが、性に合っていたのか、毎日が楽しく、私にとって大学院生活は天国のようなものでした。

さて、大学院へ進学するとどのような利点があるのでしょうか？ 歯学部ニュース平成19年度第1号に、研究して論文にまとめるという過程を通して「科学的なものの見方・考え方」が身に付き、と述べられてありました。私もこの意見に賛成です。そのほかのよいことは、研究を通して他大学の先生と交流をもつことができるようになることです。他大学とは、歯科大学とは限りません。医学部、理学部、農学部や生命科学系の研究所、外国の大学でご活躍されている先生が、私の研究に興味を持ってくださったり、私の方から研究のご意見を伺うなど、学会発表で質疑応答を通じて、懇意にさせていただくことができました。このことは、今の私にとってかけがえのない財産になっ

ています。

私のように基礎研究を仕事に選んだ場合、理学部や農学部の大学院生と同じで大学院修了後の就職先を探さなければなりません。私の場合、新潟大学歯学部生理学講座の教員のポストは埋まっていたので、他大学の教員になるか、どこか企業の研究員になる必要がありました。大学院4年生の春頃、某大学農学部系の講座の助手の公募に応募したのですが、助手の採用前に、教授選考をしなければならぬ事態になってしまい、事実上、公募がながれてしまいました。オーバードクターか……と、大学院修了後の身の振り方について悩んでいたところ、研究がきっかけで親しくさせていただいていた他大学の先生から、米国ミシガン大学でポストクをやってみないか？ というお話しをいただきました。このような幸運に恵まれた

のも、大学院でのびのびと研究をさせてもらったからだと思います。

・現在

大学院を修了と同時にポストクとして米国ミシガン大学、その後日本大学(助手)、日本歯科大学東京校(講師)、そして平成20年4月から再び日本大学(講師)と、新潟を離れてから6年間、およそ2年ごとに勤務先が替わっていますが、楽しく研究を続けています。現在、勤務している日本大学歯学部生理学教室の痛覚研究のレベルは、日本の中でトップクラスにあります。最近は、痛覚だけではなく、嚥下反射を含めた咽・喉頭領域の感覚受容の研究も始めました。東京で大学院生活を送りたいとお考えの方は、一度見学に来て下さい。



大学院で培う「眼」と「人」の輪

福島県喜多方市 有隣病院勤務 木 島 寛

(32期生・平成18年3月 新潟大学大学院医歯学総合研究科博士課程修了)

国家試験の2週間前に娘が誕生→その1ヶ月後に大学院に入学→その翌年に次女が誕生→小児歯科の大学院を卒業→何故か他大学の口腔外科に移籍→地方の病院歯科勤務……こういうへんてこりんな経歴を歩んでいる私に、このような執筆の機会が巡ってくる不思議……おそらくこれは、今まで散々お世話になっている大学院にちょっとは恩返しをしなさい、という神のおぼしめしかなと解釈し、大きくなった娘たちにキーボードを妨害されながらもパソコンに向かっております。大学院の4年間で培った経験は、歯科医師としての私の礎と言っても過言ではなく、その有形無形のメリットが読んでいらっしゃる方に伝わればと思います。

私は平成14年3月に卒業後、小児歯科の大学院に進学、研究は口腔生理学にお世話になることになるのですが、その進学理由はというと…長い歯科医師人生、研究というものを経験しないまま大学を出るのはもったいないと思った貧乏根性。自分のような劣等生が何の武器もないまま世に出るのはまずいと思った危機感。初めての子育てにあたって、ある程度時間の融通がきくかな……という甘い考え。学生時代から仲良くさせていただいていた口腔生理学の真貝富夫先生や小児歯科学の田口洋先生との親近感……など、かなり不純な理由ではありましたが、まあ理由はどうであれ、その時の自分の「感覚」を信じて本当によかったなと今でも思います。

さて大学院に入ってから研究メインの毎日になるわけですが、最初はセミナーにおける周囲の人の言語、英語の論文、そもそも研究とは？……気持ちいいくらいにさっぱりわかりません。加えて、卒後すぐに勤務医となった同級生の、もうこんな治療をしているとか、このくらい稼いでいるとかいう青々とした隣の芝生情報……。本当に自

分の選択は正しかったのかと自問する瞬間も、正直ないわけではありませんでした。ですが時間が経過し、こなすべき目の前の仕事が増えてきて(子供も増えましたが)、研究の面白さを少しずつ感じるようになってからは、そう考えることもなくなりました。私の所属した真貝先生の研究室は早い段階で自分のテーマを与えられ、人一倍の経験をさせていただけるラッキーな境遇でした。100匹以上のラット君の犠牲のもとに行った動物実験……試行錯誤する過程を学ぶばかりか、その手術手技は臨床でも生きました。4年間で8回も機会を与えていただいた学会発表……人に自分の考えを伝える難しさを知り、「口演でも原稿なし」のスタンスは人前で話す度胸も付いたと思います。また学会でupdateな刺激に触れるという習慣もいつの間にか染み着きました。



臨床面でも、優し〜い小児歯科の先生方のご指導のもと、大学病院の診療に携われたのはかなりの収穫でした。診療内容にしても来院する患者さんにしても、独特なものがある大学病院の診療は他では決して経験できないものです。また行かせてもらった数々の出張経験も、いろいろな先生と出会え、また医院自体を拝見することができ、多くの気づきをいただきました……しかもお給料付きで。いずれの経験も現在の私の武器となっております。

……と真面目なことを書いてはみましたが、楽しい思いもかなりさせていただきました。全国津々浦々行かせてもらった学会の数々。福岡の学

会に行くお金がなくて、「青春18きっぷ」で行った23時間の電車の旅もいい思い出です。学会準備を頑張った自分へのご褒美！ という自己正当化のもと、ご当地の食べものを楽しんだり、観光スポット（野球場巡り）に行ったりもしました。また真貝先生の幅広い人脈のおかげで、他職種の方々と交流する機会（しかも当然お酒付きで）にも恵まれ、住む世界が狭くなりがちな歯科界で違う畑の考え方に触れられたことは貴重な経験でした。……実は今回、大学院時代を振り返るにあたり、出てくるのは楽しい思い出ばかりで、開催された飲み会の数々は字数の関係でやむなく割愛です（笑）。……イヤ、遊んでばかりいたわけではない（と思う）んですけど……。

大学院で得たものを端的に言うならば「眼」と「人」でしょうか。物事を様々な角度から見る「眼」、常識を疑う「眼」というのは、研究の難しさや面白さに実際に触れることがなかったら、おそらく気づかなかったことだと思います。また院で広がった「人」脈も大きな財産で、出会えた人

の数だけ自分の「幅」が四方八方に広がっていったような気がしています。一応、学位を授与され、名刺にも「歯学博士」と刻める身分にはなりましたが、その肩書よりも、「肩書を得るまでの過程」こそ、大学院の最大のメリットと言えるのではないのでしょうか。

……とここまで読んでくれたそのあなた！ 「大学院もいいかもなあ」と1ミリでも感じていただけたら、私も娘の妨害に打ち勝ち原稿を仕上げた甲斐があるというものです。こんなパターンもあるんだ、ということで頭の片隅に置いてみてはいかがでしょうか。

私は自分に関わってくれた全ての人のお陰で、ラッキーな歯科医師人生を歩ませてもらっています。最後に、ときには家計の残高が1万以下になりながらも、私のわがまま気ままな生き方につきあってくれている妻と3人の娘（昨年もう一人増えました）に感謝し、筆を擱かせていただこうと思います。

